



輪島港 (石川県)

能登半島の北端に位置する輪島港は、悪天候時に船舶を受け入れる避難港。多くの漁船が行き来する近海漁業の基地でもある。港近くで開かれる恒例の朝市は、輪島の観光名所としてにぎわいを見せている。



舳倉島とを結ぶ定期船は1日1往復。到着便には、クーラーボックスを抱えた釣り人、大きな望遠鏡を手にしたバードウォッチャーの姿が目立つ。



■新鮮な山海の幸が集まる朝市

輪島の朝市通りには、朝8時から12時頃まで、道の両側に200軒近くの出店がずらりと立ち並ぶ。屋根つきテントの店もあれば、ビニールシートの上に商品を置いただけの店もある。とりわけ威勢がいいのは年配の女性たちだ。「お父さん、ちょっと見てって」「帰りにまた寄ってや」。あちこちの店先で客引きの声が飛び交っている。

販売されているのはおもに農産物と海産物、民芸品を並べている店もある。鮮魚では近海でとれるノドグロ、甘エビ、アワビなど、加工品ではサバやカワハギの糠漬け、アジやカレイの干物、海藻類……等々、種類は豊富だ。農産物はネギ、大根、さつまいも、柿など、野菜・果物のほか、梅干や漬物といった手づくり食品が売られている。立ち止まって見ていると、「全部おばちゃんが漬けたん。買うて」と声をかけられた。輪島朝市は807（大同



2) 年、市内にある住吉神社の祭礼時の物々交換に端を発しており、1200年以上の歴史をもつ。毎月10、25日の定休日と正月三が日を除いて、ほぼ1年中開催されている。かつては市民の台所としての役割を果たしてきたが、近年は観光需要が大半を占めるようになった。

朝市を運営する輪島市朝市組合によれば、組合員の平均年齢は67歳、最高齢は89歳、そのうち8割強が女性である。朝市に出店して40年という85歳の女性に尋ねてみると、家の畑で収穫した野菜を「小遣い稼ぎに売りにきている」のだという。ご主人が漁で釣ってきた魚を一夜干しにして、リヤカーで売っているお母さんもいたり、多くは農業や漁業を営む人たちだ。

「お客さんとのやりとりが気晴らしとなり、お年寄りの元気の源となっているのでしょう。輪島の女性のパワーはすごいですよ」(同組合専務理事・栃木さん)。

＊

輪島港の船だまりには、たくさんの小型船が繫留されている。同港を拠点とする漁船はおよそ300隻、県内で最大数を誇るというから、朝市に並ぶ魚介類が豊富なもうなずける。早朝の港では、まだ夜明け前から水揚げが始まっ



のんびりとした風情が漂う輪島港。出入りするのは小型の漁船がほとんどだ。

ていた。運び出される魚を仕分けし、箱詰めする作業をテキパキとこなすのは、ここでもまた女性の姿が目立っていた。

漁業の前進基地である一方、輪島港は「避難港」としての役割も果たしている。能登半島沖は航行する船にとって難所とされてきたが、暴風時などに停泊できる場所は少なかった。このため、1951（昭和26）年、立地・地形的条件に適していた同港が県内唯一の避難港に指定された。以来



お年寄りが元気に活躍する輪島の朝市。それぞれに店を開く場所が割り当てられている。

3つの堤防が整備され、現在は数隻の大型船舶が同時に避難できる泊地を造るべく、第四防波堤の建設が進められている。

■分業体制が支える輪島塗の伝統

中世の時代、輪島港は北前船の寄港地として栄え、日本海沿岸の輸送拠点となっていた。地場産業である「輪島塗」も輪島港から各港に運搬され、全国に広まったといわれている。もともと輪島には、ケヤキやうるしの木などが身近に生息しており、それらを原材料に寺や神社で使う椀や膳を作ったのが発祥。現在の基本的工法が開発されたのは、寛文年間（1661～73年）と伝えられている。

輪島塗最大の特徴は、堅牢なこと。原料である珪藻土の一種を焼成粉末にした「地の子」を漆に混入、塗り研ぎを何度も繰り返し、損傷しやすい部分に漆で布を貼付して補強する「布着せ」を取り入れるなど、丈夫な下地を作る独特の工法が受け継がれている。製造工程は百以上にも及ぶため、木地師、下地塗師、中塗師、研師、上塗師、蒔絵師、沈金師、呂色師など、職人による分業体制が確立されているのも特色だ。輪島市内にはこれらの工房が点在しており、



漁協市場の前では、早朝から魚の水揚げ作業が行われていた。

一般の見学を受け入れている所もある。

河井町にある「輪島工房長屋」は、輪島塗の工房が集まった交流施設。各工程の仕事を見学し、職人から話を聞くこともできる。完成した漆器に加飾する方法には、漆で絵を描き、金・銀粉を蒔きつける「蒔絵」、ノミで彫った部分に漆を薄く塗り、金・銀粉を沈める「沈金」などがある。蒔絵師歴20年、大森修さんの工房を見学させてもらった。

蒔絵師の仕事は、発注者の要望を受けてデザインを考え、文献などを参考に図案を描くことから始まる。モデルがある場合には、ディテールを確かめるため、実物のスケッチに出向くこともあるそうだ。「一つの器にストーリー性を打ち出し、伝統の中にも面白さを感じてもらえるような絵柄を描いていきたい」と大森さんは話す。

■マリンタウンプロジェクトを計画

現在、石川県と輪島市では「マリンタウンプロジェクト」を推進中だ。この事業では、河井浜の一部を埋め立て造成し、大型客船に

対応できる岸壁、親水護岸や港湾緑地、朝市の玄関口に立地する観光交流施設などの整備が計画されている。朝市、漆文化といった地場産業を観光ニーズと結び付け、海と港の景観を生かしたまちづくりを目指している。

2007年3月に発生した能登半島地震では、大きな被害に見舞われた輪島市。地元の人からは、地震に襲われたときの恐怖や、店の棚から落下した商品がすべて売り物にならなかったなど、被害の話も耳にした。震災から半年以上が過ぎたいま、その痛手を乗り越えながら、町は着実に復興へと歩んでいるように見えた。

(取材・文／小野寺明子 写真／坂本政十郎)



香合（香料の容器）に、漆で波の模様を描く「蒔絵」の工程。漆器の状態に合わせて、適した筆を使い分けるのだという。



港の周辺は子供たちの遊び場にもなっている。

横浜植物防疫所統括植物検疫官 濱砂武久さん

横浜市内牧に位置する、約35万平方メートルという広大な海岸の敷地内に、世界各国の貨物船から積み降ろされた、おびただしい数のコンテナが並んでいる。

「このコンテナヤードには穀物や果実類、香辛料など各地から届いた輸入品が集められ、植物の病害虫がいないかどうか、植物検疫が行なわれます」と農林水産省・横浜植物検疫所の防疫官である濱砂武久さんは話す。

植物の病害虫が新天地に侵入すると爆発的に増えて農作物や緑資源に大被害を与え、しかも根絶は困難で莫大な費用もかかるという。国際貿易の進展に伴い国内に輸入される農産物は種類・数量ともに増加傾向にあり、病害虫が侵入する危険も増しているのが現状で、植物検疫所はそのような被害を防ぐために、全国の海港や空港での輸入検疫、国内での重要病害虫の蔓延を防ぐ国内検疫、諸外国の要求に応じた輸出検疫を実施している。

濱砂さん担当の横浜港エリアは、全国一の取扱量を誇る。「現在は冷蔵・冷凍設備があるコンテナが多いので、植物が新鮮なまま届く反面、病害虫が侵入する危険性も高く、慎重か



つ集中して検査を行っています」。検査はコンテナヤードで、植物ごとの規定により定められた数量を綿密に調べていく。例えばメキシコ産のアボカドやレモン。ルーペで表皮を、一部はヘタを切り取り調べる。「1ミリにも満たない微細な病害虫も多く、ちょっとした隙間に卵を産む習性があるので、細かくチェックし

ます。病害虫が発見されなかった場合は合格証明書が発行され市場に流通していきますが、仮に発見された場合はそれを事務所に持ち帰り病害虫を確認・特定し、状況に伴い、消毒した後合格、もしくは破棄、積戻しなどの検疫措置を行ないます」。より確実・迅速に病害虫を特定するため、過去のデータや諸外国の状況といった情報を把握しておくことも重要だそう。

「調べるのは植物だけでなく、コンテナの壁や床など多岐に渡ります。植物防疫官の仕事は、水際で輸入植物類を検査し、農産物の病気や害虫のまん延を防止して食糧を安定供給すること。日々緊迫感を持って取り組んでいます」。食の安全や安心、農産物の安全と発展は、濱砂さんたち植物防疫官の陰なる活躍があってこそ。それを忘れてはならない。

(取材・文／大正谷成晴 写真／横山正次)

今号のテーマ：「宇高連絡船の思い出」

●千葉県我孫子市 鈴木文一郎さん



もう20年以上も昔の話になりますが、生まれて初めて、香川県の高松市と岡山県の宇野市を結ぶ宇高連絡船に乗りました。日もすっかり落ちた頃、高松港で船に乗り、宇野に着いたら寝台特急「瀬戸」に乗り換えて東京へ向かう、というルートです。高松港を出港する時、当時ヒットしていた山口百恵の「いい日旅立ち」が港に流れたことを今でも覚えています。旅情をたきてたる粹な演出でした。いまでは本四架橋ができて、本州と四国の行き来はとても便利になりましたが、連絡船ならではのロマンチックな風景が失われたことは、ちょっと寂しい気がします。

応募要領

募集テーマ：「みなとの思い出」「みなとでの出来事」「大好きなみなと」「みなとの食」等々、みなとにまつわる話ならなんでも結構です。400～600字程度の文章を原稿用紙にお書きください。ワープロ等の場合はA4普通紙でもかまいません。住所・氏名・年齢・電話番号・匿名希望の有無を書いた紙を同封し、下記宛先まで封書でお送りください。

掲載は氏名および主だった市町村名等のみ。頂いた文章の趣旨が変わらない範囲で編集させていただく場合がございます。また、E-mailでの投稿もお待ちしております。E-mail：post@phaj.or.jp 採用された方には、クオカードをお送りします。

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-3-5 国際山王ビル 8階 社団法人 日本港湾協会内 みなとだより編集部宛